

第14回全日本小学生ボウリング競技大会

7月25～26日
稲沢グランドボウル



4年生から6年生まで141選手が集い熱戦



▲各部門優勝者、左から女子6年生・井村瑠菜、5年生・奥山花蓮、4年生・河野伊織、男子4年生・船木雄紀士、5年生・田中陽翔、6年生・志賀勇斗の各選手

各部門、予選6G、決勝3Gの9Gトータルで争われた。

4年生男子の部

予選は後半570と伸ばした齋藤匠選手(茨城・那珂市立菅谷東小)がトータル1086でトップに立っていた。しかし齋藤選手から87ピン差の3位で進出の船木雄紀士選手(新潟・上越市立直江津小)が、2Gを終わって22ピン差に詰めると、



▲決勝で鮮やかな逆転の船木選手「自分のホームセンターと同じようなコンディションで投げやすかった」

最終G174の齋藤選手に対して、206を打って、13ピン逆転する1595で優勝を決めた。

4年生女子の部

「初めての全国大会でドキドキした」と振り返った河野伊織選手(香川・高松市立香西小)だが、4G目にはハイゲーム賞となる211を打つなど断トツの



▲「立ち位置などアドバイスしてもらえて心強かった」と河野選手、2位以下に大差をつけての圧勝だった

トップで決勝に進むと、決勝も会心のボウリングで560と伸ばし、トータル1583で圧勝した。河野選手には離されたが、菅絢音選手(静岡・焼津市立港小)が1239で2位に入った。

5年生男子の部

予選を1179で1位の星野礼登選手(埼玉・川口市立前川東小)が、決勝も逃げ切るかと思われたが、4位で決勝進出の田中陽翔選手(栃木・下野市立石橋北小)が「曲がらないボールに替えたのがよかった」と704を叩いて、星野選手を16ピン逆転する1798で優勝した。田中選手は昨年の4年生の部に続く連覇だった。

5年生女子の部

4年生の部に続く連覇を狙う奥山花蓮選手(三重・大津市立田上小)が「ボールの選択やラインどりもうまくいった」と



▲「地元のセンターでコンディションを作って練習させてもらった」田中選手は4年生の部に続く連覇を達成



▲「いろんなオイルパターンを引いてもらって練習してきた」準備ができて奥山選手も連覇を達成

立神山小)が、予選前半708、後半739と700シリーズを連発して2位以下に100ピン以上の差をつけていた。決勝は576と少しペースダウンしたが、トータル2023で初優勝を飾った。予選3位の石川蓮太良選手(栃木・宇都宮大学共同教育学部付属小)が決勝で717を打ったが、52ピン及ばなかった。

6年生女子の部

予選を1142の矢島翠心選手(東京・渋谷区立笹塚小)が1位、2位には、5年生の部に続く連覇を狙う井村瑠菜選手(茨城・取手市立寺原小)が70ピン差でつけていた。決勝は二人のマッチレースとなったが、最終G171と伸ばせなかった矢島選手を、203とまとめた井村選手が11ピン逆転する1691で連覇を飾った。

6年生男子の部

志賀勇斗選手(愛知・一宮市



▲「決勝は緊張もあつたけど、予選の貯金があつたので気持ちよく投げられた」と、快勝の志賀選手



▲矢島選手との接戦を制した井村選手「決勝で逆転できてうれしい。中学に進んでも全中で勝てるように頑張りたい」

特別編 Vol.17 report 山下 知且 ワールドユースをレポート

7月9日から18日まで、お隣の韓国にて『2024IBF世界ユースボウリング選手権』が開催されました。世界38の国と地域から男女合わせて232名が参加。日本からもユース世代を代表するメンバー8名が派遣されました。

各国男女4名ずつが1チームで、男女別シングルス戦、男女別ダブルス戦、男女別チーム戦、そして男女混合チーム戦の4つの競技種目があり、日本チームはすべての種目に出場しました。

最初の種目、男女別シングルス戦は、予選6Gで上位16名がマッチプレーに進出します。女子は、群馬の渡辺希理が予選6位で進出し、マッチプレーでもメダル圏内まで行きましたが、同ポイントで並んだシンガポールの選手に、タイブレーカーロールオフ(1G対決)で敗れ、惜しくもメダルを逃しました。男子シングルス戦では、昨年アジアジュニア選手

権でマスターズ戦を制した埼玉の齋藤大哉が予選11位で進出。女子の渡辺と同じく、決勝進出順位で同ポイントとなり、ロールオフでスウェーデンの選手に惜しくも敗れました。

続く女子ダブルス戦では濱崎りりあ・渡辺希理ペアが予選2位でマッチプレーに。これもメダル権内を争い、日本、アメリカ、コロンビア、フィンラン

ドの4カ国が並び、1Gマッチの末残念ながらメダル獲得はなりません。男子ダブルスは、出場した2チームとも予選敗退となりました。

ここまでメダルなく背水の陣で臨んだ4人チーム戦は、男女ともにマッチプレーに進出。女子は惜しくもマッチプレーで



▲日本代表の前列左から濱崎りりあ、渡辺希理、近藤真桜、高田真帆、後列左から、長尾脩甫、須田風海音、齋藤大哉、座波政斗の各選手



▲下地監督を中心にミーティング

敗退しましたが、男子は5勝2敗の15ポイント、Bグループ2位で準決勝に進みました。チェコとの3位決定戦は、2Gを先取した方が勝ちというなか、日本は幸先よく1G目を237:217で勝利。2G目は最終フレームまでもつれる展開でしたが、惜しくも181:183で敗退。続く最終ゲームも223:265で落とし、銅メダルが確定しました。日本に勝ったチェコはその後の決勝戦、日本でお馴染みのパーカー・ボーンIIIの息子であるブランドン・ボーンを擁する強敵アメリカにも競り勝ち、金メダルを獲得しました。

今大会から採用された男女混合チーム戦は、残念ながら2チームとも予選で敗退し、すべての競技を終えました。

2人チーム戦からあとのイベントは、すべてパーカー方式で行われたり、16名(チーム)を残してのマッチプレーラウンドロビンであったりと、以前とは大会の内容が様変わりし、活気あふれる大会になったと思います。日本はメダルを目前にプレーオフで負けてしまうという、非常に悔しい展開が続きましたが、男子チーム戦で銅メダルを獲得してくれたのはとてもうれしかったです。

両手投げの選手が随分増え、右利きの選手が、レーンが荒れるとバックアップで左のシングルを投げて、高スコアを出すようなことも多かったように思います。若さあふれる選手たちのイキイキとしたパフォーマンスに、ボウリングの未来を期待せずにはられません。



やました・ともかつ
1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年～2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。